

HOCHBILD

詩を読む
(その一)

Die Sonne, Helios der Griechen,
Fährt prächtig auf der Himmelsbahn,
Gewiß, das Weltall zu besiegen
Blickt er umher, hinab, hinan.

Er sieht die schönste Göttin weinen,
Die Wolkentochter, Himmelskind,
Ihr scheint er nur allein zu scheinen;
Für alle heitre Räume blind

Versenkt er sich in Schmerz und Schauer,
Und häufiger quillt ihr Tränenguß;
Er sendet Lust in ihre Trauer
Und jeder Perle Kuß auf Kuß.

Nun fühlt sie tief des Blicks Gewalten,
Und unverwandt schaut sie hinauf;
Die Perlen wollen sich gestalten:
Denn jede nahm sein Bildnis auf.

Und so, umkränzt von Farb' und Bogen,
Erheitert leuchtet ihr Gesicht,
Entgegen kommt er ihr gezogen;
Doch er! doch ach! erreicht sie nicht.

So, nach des Schicksals hartem Lose,
Weichst du mir, Lieblichste, davon;
Und wär' ich Helios, der Große,
Was nützte mir der Wagenthron?

研究ノート

詩
を
読
む
(その一)

——ゲーテ『西東詩集』「高き像」——

牧
野
陽
子

詩を読む（その一）

高き像

太陽、ギリシア人のヘリオスは、
天空の軌道を堂々と走っていた。
全世界を征服することを確信して
見廻し、見下し、見上げている。

彼はみた、最も美しい女神の泣いているのを、
雲の娘、天のこども

彼は彼女のためにのみ輝いているように思われた。
太陽は、他の晴れわたった空間には盲となつて

苦痛と不安に身を沈ませた。

そして彼女はますます涙の雨をほとぼしらせた。

太陽は、彼女の悲しみの中に喜びを送り、

一つぶ一つぶの真珠に接吻に次ぐ接吻を与えた。

すると今、彼女は太陽のまなざしの力強さを深く感じ、
じっと眼をすえて上をみつめていた。

真珠は形になろうとした。

それぞれが太陽の似姿を我が身にとり入れていた。

かくして、色と弓形の半円で囲まれて

彼女の顔は晴れやかに輝いた。

太陽は彼女に引きつけられて身を寄せようとした。

だが、ああ、ついに彼女に達することはできなかった。

かくの如く、運命のきびしい掟のように

恋人よ、君は私から遠ざかっていくのだ。

そして私が偉大なヘリオスだったとして、

車の王座が何の役に立つというのだ。

*

*

*

詩を読む(その一)

太陽、ギリシア人のヘリオスは、

天空を堂々と走っていた。

全世界を征服することを確信して

見廻し、見下し、見上げていく。

一点のくもりもなく晴れわたった群青の天空に、真昼の太陽が輝いている。

詩の冒頭、一行目は力強いリズムでいきなり名詞を並列させ、ギリシャ神話の太陽神ヘリオスの姿を重ねあわせて登場させる。そのため、ここに地中海の明るい光にあふれた、何の不安もかげりもない鮮やかな紺碧の空が舞台として連想され、更に太陽は単なる天体としてではなく、神のような自信と威厳にみちた一人の男性の比喩となつて、ここに一つのドラマの展開を予感することができる。

ヘリオスは、地上からみれば、黄金の四輪馬車にのつて天上を翔けめぐる超越した存在なのだが、自らもそれを自負している。彼は全宇宙の征服者であることを確信して——つまり本当にそうであるかどうかはわからないが、とにかくそう信じて、地上を天空から見下しているのである。ヘリオスは、高みから地上的なものをすべて自らの視界の中に、即ち理解の中に把握していると信じて、その確信のために、何の不安もなく自らの存在に充足しているわけである。

彼はみた、最も美しい女神の泣いているのを

雲の娘、天のことも

ふと太陽は、自分の斜め下方に小さな雨雲の生じたのをみつける。この美しい女神とは、やはりギリシア神話の虹の女神イリスのことで、ヘリオスとイリスの恋のエピソードがこの詩の展開の下敷としてふまえられていることがわかる。そして第一連が「起」とすれば、ここは「承」にあたり、太陽の心の変化への動きが始まったことを示す。泣いている雨雲との出会いは、その転機となったのである。

彼は、彼女のためにのみ輝いているように思われた。

太陽は、他の晴れわたった空間には盲となって、苦痛と不安に身を沈ませた。

泣いている小さな雨雲を見た太陽は、彼女の方へ吸い寄せられるように降りて行く。「この個所は、改造社版茅野蕭々訳では、「すべての明るき場所をば見で、彼の、み、照ると女神は思ふ」とあり、人文書院版大山定一訳では「太陽が明るい光の中で孤独だと思っっているうしかった」となっているが、ある仏訳(Aubier Henri Lichtenberger 訳)では、*“Il ne sent le brillier que pour elle”* (彼女のため、にのみ輝いているように思われた)となっていて、この方が語学的にも正しい。この太陽には、まだ「孤独」という認識はない。それはあくまで虹との別離後に悟られるものである。」

太陽には本来あまねく照らすべき広大な空間がある。だがその空間の広がりも、また自らの役目をも打ち忘れて、光から引き離されて悲しんでいるかにみえる雨雲の存在に関心を移してゆく。これは、全体的に均一に照ら

詩を読む(その一)

していた陽光の広がりですと雨雲の中に狭められ、凝縮されてゆく動きであり、他方、地上からみれば、太陽が雨雲の裳裾の中にまさに「身を沈ませた」ようにみえるのである。

そしてここには更には太陽自身の感情の推移が示されているともいえよう。ヘリオスは、イリスの悲しみを自分の悲しみとして近づいてゆく。いわば、蒼天に輝く太陽が、イリスの存在を認めることにより Schmerz と Schauer すなわち雨雲の象徴する悲しみ——太陽が雨雲からひいては地上から離れていること——が太陽の心の中に入ってくる、或いは、無意識に心の中にあつたものに光があつたという、ヘリオス自身の心の中の動きと言えるのである。つまりこの悲しみはイリスのものであると同時に潜在的にヘリオスのものであり、そうなるべきものであつた。いやむしろ、悲しみ自体として存在するのかもしれない。イリスとはヘリオスにとってそのような悲しみと不安をヘリオスに自覚させた存在、きっかけなのである。

そして彼女はますます涙の雨をほとばしらせた。

太陽は彼女の悲しみの中に喜びを送り

一つづ一つづの真珠に接吻を与えた

すると今、彼女は太陽のまなざしの力強さを深く感じ

じっと上をみつめていた。

にわか雨の降りしきる中に凝縮された太陽の光が注がれる、極めて美しいイメージである。ヘリオスの同情と

愛情が自分の方にふり向けられると、イリスは一瞬、前よりも激しく悲しみのにわか雨を降らす。泣きべそをかいている小さな子供に「どうしたの?」と聞いてあげると、急にわあっと泣きじゃくり、しばらくすると落ちついて泣きやむように、イリスもヘリオスとの感情的同一化によってまるで一瞬エネルギーを得たかの如く、ますます自分の感情がかきたたられてしまうのだが、涙の一粒一粒に恋人の光の接吻を受けているうちに、だんだん気持も鎮まる。感情を分けあっていることに気づき、自分に向けられた恋人の気持の強さに慰められて、イリスはじっとヘリオスをみつめるのである。

真珠は形になろうとした。

それぞれが太陽の似姿を我が身にとり入れていた。

かくして色と弓形の半円で囲まれて

彼女の顔は晴れやかに輝いた。

気持が鎮まり、太陽の光を我が身に受けとめた時、悲しみの涙は太陽の似姿をうつしだし、ばらばらだった涙の雫が一つのまとまった形——虹になろうとする。「なろうとした」と訳したが、この個所には不明確なものが明確な姿へと自己形成する時の、強い意志と力が働いている。そしてここには二重のフォルムの形成がある。一粒の雫——真珠という微小な世界に大空の太陽という巨大なもの似姿が宿され、結実されること、更に、茫漠とした悲しみと不安の雨雲——雫の集合に他ならなかったものが、虹という、天上の世界と地上の世界とを結ぶ

詩を読む（その一）

美しい現象に結実したことである。この壮大な自然のドラマにおいて、この詩はクライマックスに達しているのであり、詩全体を支配する最も強い映像がここに描き出される。天上に偉大な太陽が燦然と輝き、地上との間の中天には、無限に散在する何万、何億の雨の微小な球体がその一つ一つに太陽を宿し、呼応するかの如くに輝きあいながら、地上とのかけ橋となっているのである。

この宇宙の自然現象のイメージは、理屈や解釈を抜きにして十分美しい。だが、ここで雲や虹の形成が何を象徴しうるかも考えてみる必要があるかと思われる。太陽は天上に孤高に存在するものだが、雲とは、天上的なものと地上的なものとの間にあってもやもやしているもの、つまり両者の分離している状態の悲しみと考えられよう。（と同時に、その悲しみを自覚させるといふ第一段階をふませることにより、両者の結合への可能性をも秘めているといえる。）また、虹については、ギリシア神話の中で、イリスが、神々（特にゼウス・ヘラ）の言葉を地上の英雄達に伝える有翼の使者の役目を与えられていることから、虹が天地の結合を象徴するのは明らかである。従って雲が虹に形成されたというのは、分離の悲しみが消え去り、一瞬、両者が結合した姿をとったということになる。そしてそれを可能にしたのは、涙の真珠に太陽の *Bildnis*——似姿・像が宿ったから、つまり、天上的なもの（普遍的・イデア的なものと言いかえてもよいかと思う）が地上的（個別的・現世的）なものの中に具現し、結実したからなのである。

この段階において、イデア的な王者の地位を保っていた太陽が、太陽であり続けながら、つまり高みを保ち続けながら、地上的なものに接触し、イデア的なものと地上的なものを結合させることへの望みと方向性を持つに至ったのであり、それは虹という現象の中に実現されたかのようにみえる。だが、それが束の間に消え去る運命

にあり、あくまでも Bildnis——像にすぎなかったことが次に明らかになってゆく。

太陽は彼女に引きつけられて身を寄せようとした。

だが、ああ、ついに彼女に達することはできなかった。

イリスに触れたのは、ヘリオス自身ではなく、その光であった。ヘリオスの似姿が結実したのは、イリス自身というよりも、その涙の中であった。しかもそれはあくまでもヘリオスの写し、——Bildnis、イマーゴ（にせもの）という語源をもつ、イメージなのであった。虹はたしかに美しく、一種の愛の調和であり天地の結合といえるが、それは像としての結合であり、実質としての結合ではいまだない。あくまでも、真昼の光——ものを明確に映し出す一面的な白昼の世界、アポロ的な世界の中での、かりそめの像としての結合に他ならないのである。

ギリシア神話の中で、ヘリオスはイリスに恋をし、彼女を追ったが、近づくにつつと消え去り、決して得ることではできなかった。また、オリエントに多い太陽と朝露の神話も悲恋である。朝露は、朝の陽光を全身で反映して喜びに輝いているかのようにみえるが、太陽が彼女を激しく愛し、熱い光線を注げば注ぐ程、それだけ早く朝露は蒸発して、太陽の前から姿を消さなければならない。いずれの場合でも、太陽は太陽である限り、虹・露との間の絶対的距離の存在のために近づくことはできず、別れが運命となるのである。

かくの如く、運命のきびしい掟のように、

詩を読む（その一）

詩を読む（その一）

恋人よ、君は私から遠ざかってゆくのだ。

ここではじめて、詩人とその恋人が登場する。彼らの別れ——つまり人間界での合体の不可能は、自然界でも運命と決まっているということなのだ。二人の別れのみならず、このドラマ全体が、彼らの出会い、結合への意志と望み、そして別れの、実は象徴でもあったことがここに暗示されているのである。

そして私が偉大なヘリオスだったとして

車の王座が何の役にたつというのだ。

イリスに到達することができないことを知った太陽は、自らの存在に疑念を抱きはじめる。詩のこの結末において、太陽は自分が自足した存在ではないこと、何もかも照らしだし、知り尽したつもりだったのにそうではないことに気づき、太陽の心の状態は全く変転してしまう。詩の初めでは、触れたいと思うものもなく、我のみあるといわんばかりの威厳と自信にみちた存在だったのが、雨雲との出会いにより、今は対象があるのに近づけない。イデア的な高みが、「孤高」「孤独」となってしまったわけである。ここでは恐らく、天上的イデア的なもの、或いはそのようなものに達しえたという高みの認識が問題化されているのであろう。（とすれば、「Hochhid」のHochも、詩の冒頭と結末で二重の意味を持つことになる。）その自足が、詩の冒頭における、雨雲（恋人）を知る以前の太陽（詩人）の状態なのであり、雨雲と出会ったためにその確信が覆されてしまい、今や地上的なもの

のどの調和と結合を求めずにはいられなくなった太陽は、もはや太陽ではなくなるのである。

『西東詩集』「スライイカ書」の中では「Hochbild」の次に「Nachklang」（余韻）「Suleika」（西風の歌）と続き、その後名高い「Wiederfinden」（再会）が来る。そして「Nachklang」（余韻）とはまさに、「高き像」での別れの後ヘリオスではなくなった詩人の世界を描いたものに他ならない。ヘリオスであった間は、少なくとも自分の光で相手を照らしたことによって、相手を認めることはできた。だが出会った後に合体は可能と知った時、かつて光を与えていたものは、もはやそのようには存在しえず、逆に自分の方が新たな光を必要とするようになる。まさに立場の逆転が行なわれたのであって、詩人は暗黒の中で太陽を求めるのである。

Tag mich nicht so der Nacht, dem Schmerz, / Du allerliebstes, du mein Mondsicht! / O, du mein Phosphor, meine Kerze, / Du meine Sonne, du mein Licht. 「私をこのような夜と苦しみに捨ておかないでくれ」 「月よ、暁の明星よ、灯火よ、太陽よ、わが光よ」と恋人への呼びかけが段階的に強まっているのは、詩人の方がどんどん光を失ない、不安な存在となっていくにしたがって、相手が大きく光り輝く存在と映るからである。そしてその加速度的変化はまた、太陽が沈んだ後の、夕方から深夜への闇の深まりと沈潜に照応しているのである。

太陽が太陽である間は結合は不可能であった。だがそれなら、太陽でなくなったらいいかというところではない。光るのをやめたら、イリスを見失ない、みいだすことすらできなくなった。完全な別離と闇の世界に陥ったのである。いわば一つの極端から他の極端へ、しいていえば、普遍的・全体的な真理を光によって透視する詩人から、光を求めて夜をさまよう詩人へと変転しただけである。詩人の求めているのは、その調和と結合なの

詩を読む(その一)

である。そしてその真の結合は、黎明に至る必要な一段階としての闇をへた後の、黎明の朝焼けの中にはじめて実現されるのであり、それがヘリオスとイリスの、ひいては詩人と恋人との“Wiederfinden”(「再会」)に他ならない。

マリアンネ・フォン・ヴェレマーとのハイデルベルグでの再会の喜びに宇宙創造の原理をも高らかに歌い上げた傑作との評の高いこの詩については、「高き像」とのつながり以外、ここで改めて語る必要はあるまい。「再会」の中で、黎明とは、存在するために別れ、対立していた様々のもの——例えば光と闇、天上と地上が、再び出会うことであり、それは原初の混沌としての共存ではなく真の調和と結実であるとされている。いわば「再会」の中で、黎明のイメージを提出することにより、「高き像」の結末に対する解決が示されていることになる。そこではイデア的なものの高みは否定され、*‘auf die Erde’*「地上」で分離が超越され、第三の存在としての結合が達せられている。そしてまさに黎明における朝焼けの美しさこそ、虹が暗示した結合の象徴といえよう。朝焼けは、虹のように白昼の中の一部が七色の弓形となっているのではなく、空全体が、世界全体が微妙な七色に包まれ、その色彩の中に調和しているのである。そして「高き像」における虹の形成は、二重の意味で Bild だったわけである。——あくまでもかりそめの幻像として、そして更に、まだ実現していないものの似姿・予言であり、真の結合への契機となる‘Bild’として。

このように見て来れば、“Hochbild” 及び “Wiederfinden” に至るまでの四つの詩は、一つの密接で有機的かつ象徴的なまとまりを持つものとみなすことができよう。太陽の運行、惑いは光という視点に立てば、この四篇で太陽は、真昼の天上から西に沈み、深夜の暗闇の世界をへて、再び東の黎明の中に、丸一周して浮上してくる。

そして、自分の生活と感情の動き、思想そのものが宇宙と自然の秩序と照応しあっているゲーテという詩人にとっては、恋人を知る前の自分から、恋人との出会い、別れ、苦悩をへて再会に至る心の軌跡そのものが凝縮されたドラマなのでもある。

そして更に、闇の「余韻」と黎明の「再会」との間に恋人ズライカの「西風の歌」がおかれていることから、詩人にとってズライカの持つ意味もおのづと明らかになる。ズライカは単に魅力的な才気あふれる女性という以上に「雨雲」の本質を自覚させたものであったと同時に、調和を予見し、再会・結合へと詩人を導いてゆく存在に他ならない。「高き像」の第五連で、かりそめの虹の冠をかぶって、顔を輝かせていたのは、虹が真の結合の予言だからであり、その晴れやかさは、喜びよりも、実現への希望だったといえる。そして「西風の歌」は、闇の中にいるゲーテに歌いかけているのだろうが、この詩自体も夜の中にあるとはいえないだろうか。そうすれば、第二連の「花々や丘や森もなく涙のつゆをおく」とは夜露から朝への移行を連想させ、ズライカが黎明という再会の実現を本能的にすべて予見していて、そこに詩人を導き、招いているということが、よりはっきりするように思われる。

この四つの詩が実際に書かれた順序は、実は、ハイデルベルグでの「再会」(一八一五・九・二四)が一番先であり、「西風の歌」はその後(同年九・二六または十・九とされている)フランクフルトのマリアンネからヴァイマルのゲーテへと「西風」に自分の気持を託して書き送ったものであった。「高き像」「余韻」(同年十一・七)はしばらく時をおいて最後に創られている。ということは、この四つの詩の配列が実際の相聞の経過に従ったのではなく、詩人の意図的な構成によるものであり、つまりは、「高き像」という詩は「再会」と対をなすも

詩を読む(その一)

のとして創られたのだと考えられる。「再会」が歓喜の只中、高揚した気分のままに溢れるがごとく流れでた詩想だとすれば、「高き像」を頭とする構成は恐らく、その歓ばしき日をいとおしみつつ振り返り、その意味を改めて自らのうちに深く問うた詩人の晩秋の書齋において練り上げられたものであろう。

太陽の運行のサイクルという壮大な宇宙現象の中に、詩人は、自らの思想の変転と、そして「ズライカ書」全体を凝縮したかの如き、恋人との関わりあいのドラマを歌いこみ、その冒頭と結末に、別れと再会、像と真として、虹と朝焼けの美しい鮮烈なイメージを描きあげた。このまとまりの中のクライマックスは、やはり「再会」であろう。だがその中の結末は、「高き像」がもつドラマティックな緊張感があつてこそ、はじめて納得できるのである。「高き像」は、そのような心の変転と展開をひき起こすに至った、まず最初の心の推移——亀裂の自覚という契機を描いている。虹という白昼の束の間の自然現象に、詩人は自らのおかれていた感情的・思想的状況をもみいだしたに違いない。それと同時に、単なる別れを歌った詩と異なつて重要なのは、苦悩の後の再会という結末の必然性が、ここにすでに虹によって暗示されていることである。それゆえにまさに、この一篇の詩は、中天にかかった‘Hochbild’——予見の像なのであろう。

引用及び製作年月日は *Goethe West-östlicher Divan*, Insel Verlag, Frankfurt am Main, 1974 によつた。